

ガンバレ！はみだしっ子

チコは学校に行かない

保坂展人



ガンバレ! はみだしっ子

188332



チコは学校に行かない

保坂展人

保坂展人(ほさか のぶと)

1955年、宮城県仙台市に生まれる。
中学時代に、学校教育に異議あり! とさけ
びだし、15歳で「内申書裁判」の原告となる。
21歳、若者の拠点「青生舎(せいせいしゃ)」
をつくり、以後日本中の生徒たちの声をうけ
とめるアンテナ役をつとめる。
月刊『明星』に元気印レポートを連載。これ
をもとに、『先生、涙をください!』『学校に
行きたくない』(いずれも集英社刊)を出版、中・
高校生に大反響。
なかまたちと『がっこうかいほうしんぶん』
を発行している。

連絡先 〒151 渋谷区千駄ヶ谷4-26-12
大増会館 2 F 青生舎



ガンバレ! はみだしっ子ーチコは学校に行かない

発行 1984年10月 第1刷© ポプラ・ノンフィクション⑬
定価 880 円

著 者 保坂展人(ほさかのぶと)

発行者 田中治夫

発行所 株式会社 ポプラ社

〒160 東京都新宿区須賀町5

振替 東京4-149271

TEL 03(357)2211

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 石毛製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

NDC916/166p/21cm

Printed in Japan 8095-122015-7764



はじめに

東京のある塾^{じゅく}で、小学生たちに話をきいた。

「どうだい。早く中学生になりたい？」と、ぼくがきくと、

「なりたくない!」「このまま、ずっと小学校にいたい」

「中学生になるのがこわい」「上級生にいじめられそう」

という答えが、口ぐちに返ってきた。

いったい、どうしてなんだい?

この本の主人公チコ^{ちゅうこう}も、小学校では元気いっぱいの子だった。

だけど、中学に入ったとたん、調子^{ちようし}が悪くなってしまったんだ。

ほんとに、いま中学校は、どうなっているのだろうか?

チコといっしょに、中学校でおきていること、そして、「学校はだ

れのためにあるのか」を考えてみよう。

それじゃあ、スタート!!

ガンバレ！ はみだしっ子 もくじ

第1章 チコは学校に行かない

チコは手紙に乗ってやってきた
ぐらぐらハートのチコ 20 6

第2章 中学で感じた壁^{かべ}

あたしたち、モルモットじゃない！
牛乳事件^{ぎゅうにゅうじけん}——それでも先生ですか？ 26

チコの日記 43

第3章 学校拒否^{がっこうきよひ}は病気じゃない

あたし、病気かもしれないな
病気なのは「学校」の方だよ 62 52



第4章 競争^{きようそう}ってなんだ？ 成績^{せいせき}ってなんだ？

点数なんて気にしない!! 78

カノコは走^{まよ}った、チコは迷^{まよ}う 87

学歴^{がくれき}ってなんだろう 100

タケシはツツパリにな^なった 111

第5章 自分のペースで歩^{ある}こうよ

いろんな人がいるんだ 120

フミエからの手紙 132

ツツパリ一掃^{いつそう}作戦^{さくせん} 139

『ミルク・マガジン』の挑^{ちよう}戦^{せん} 147

元気^{げんき}んぐジャンプ！ チコ 157

あとがき 163

★この本に掲載^{けいさい}の写^{しや}真^{しん}は、本文とは一切関係ありません。



写真撮影 萩野矢慶記

装丁デザイン・カット タケイエミコ

第1章
チコは学校に行かない



チコは手紙に乗ってやってきた



チコとぼくが出会ったのは、一通の手紙からだった。ある日、事務所のぼくの机の上に「速達」のスタンプのある手紙が届いていた。

「こんにちは、はじめまして。あたし、チコといいます。忙しいでしょうけど、あたしの話、きいてください。いま、とっても苦しいんです。もう、生きているのがめんどくさくなって、死んじやいたいと思ったりするぐらい——いけないことですけどね。」

あたしは、いま中一だけど学校に行っていないの。登校拒否って、おとなたちは言うけど、あたしに言わせれば学校拒否なんです。きのう、二週間ぶりで学校に行きました。こんどこそ、担任の先生に、あたしがなぜ学校に行かないのかを、ちゃんと説明しようと思つて……。そしたら、いきなり、『なまいきだ』って言われました。

何日もかかって、先生に説明できるだけの話を考えていたのに、アツタマにきたんだ。あたし、わかつたんです。先公せんこう（！）なんて、生徒をまともな人間として見ていないということが。いいかげんにしてよね！

それから、どうなったと思いますか？ あたし、生まれてはじめて先公せんこうになぐられたんです。担任たんになんじゃないよ。数学の先公で学年主任で、いばりくさつてやんの。職員室しよくいんしつで、大きな声で担任がどなるから、クソツと思ひながら下をむいてたんです。そしたら、関係ないのに数学の先公がよつてきて、いきなりビンタされたんです。

体罰たいばつつて、法律ほうりつで禁止きんしされてますよね。やられているのは、あたしだけじゃない。その先公、生徒をなぐるので有名なんです。あたしなんかまだ、むかし成績がよかったから、手かげんされているんだつて、ツツパリの男の子たちが言つてました。

あーあ、そんな凶暴きようぼうな先公をやめさせることはできないんでしょうか。

まだ、あたしムカついてる。あたしは学校にモンクがあるから、休んで抗議こうぎしたのに、それを、問題児もんだいじあつかいして、ぜんぜん言い分もきいてくれないから、ほんとのツツパリになつちやおうかな——なんて、チラツと思うよ。

でも、それじゃクヤシイの。

「ほら、ごらん。チコはけつきよく、不良ふりようになつたんだ」

なんて、言われるのが目にみえているから。それに、シンナーに、暴走族ぼうそうぐに、酒、タバコって、ツツパリの子のすることって、ワンパターンでしょ。親や、学校や、社会に反抗はんこうするって言ったって、自分のからだと人生を傷きずつけていくんだつたら、なんにもならないでしょ。なんかいい方法はないかな、って考えているときに保坂ほさかさんのレポートを読んだんです。こんどの日曜日に、よかつたらあたしの話きいてもらえませんか。

おからだに気をつけて。

チコ」

手にもっているだけでも、指先が熱あつくなるような激はげしい手紙だった。

タレントの記事がたくさんのついている『明星めいようじやう』とか、『セブンティーン』っていう雑誌ざっしがあるのをキミたちは知っている？ キミたちのお姉さん、お兄さんなら、知っているかもしれないね。チコからの手紙がとどいたころ（一九八三年の秋）、ぼくはそういう雑誌に、中学校や高校で毎日のおきていた事件のレポートを書いていた。

「校内暴力こうないぼうりよく」とか、「荒れる中学生あ」という言葉ことばをキミたちもきいたことがあると思うけど、

この年は日本中の学校で、たくさんの「事件」^{じけん}がおきていた。

そして、「事件」のない学校でも、中学生たちはいっせいに何かをさげびだしていた。

東京都町田市の忠生中学^{ただお}でおきた事件^{じけん}（先生が果物ナイフで生徒を刺^さして逃^にげてしまった事件）に対しても、戸塚ヨットスクールに対しても、同じ時代を生きる中学生にとっては「他人事^{たにんごと}」とは、思えなかったのだ。

ぼくのレポートを読んで、たくさんの中学生から手紙がきた。

その手紙は、元気なものよりも、悲鳴^{ひめい}をあげているもののほうが多かった。

ぼくは、ひとりひとりの手紙を読むたびに、

「どうして、みんなこう同じことをくりかえしているんだ。ワンパターンじゃないか。先生や学校に対する反発^{はんぱつ}からツツパリになる——そして、悪いことは一通りやってみる。気がついたら、もう元にはもどれない……。もっと、元気にやる方法はないのか？」

と、心のなかでつぶやいていた。

だから、チコからの手紙は、とてもうれしかった。

「親や、学校や、社会に反抗^{はんこう}するって言ったって、自分のからだを傷^{きず}つけていくんだっただんなにもならないでしょ」

と、チコが書いてきていることには、まったく同感だ。

「なんか、いい方法ないかな？」

って、ぼくもじつは思っていたんだ。

さっそく次の日曜日、ぼくはチコと会った。

東京の代々木にあるぼくの仕事場に来てもらったのだった。

約束の時間になってもチコはなかなか姿を現わさない。しかたなしに買物に出ようとしてドアをあけると、開きかけたドアにゴツンとだれかがぶつかった。

「こ、こんにちは」

と、女の子の声がとびこんできた。チコだった。

住所と地図を頼りにドアの前までやってきたけど、ノックする勇気がなかなか出てこなかったらしい。

チコは髪を後ろでたばねて、いかにも、「言いたいことあるよ」というように、くちびるをツンと結んでいた。中学生の女の子にちがいはなかったけど、よく見かける女子中学生ともちがっていた。



バ、バ、バリバリ……キューーン。テーブル銃^{じゅう}の威力^{いりよく}を見よ！

「朝があたしにとっては恐怖きょうふの時間なの」

チコは、いきなり、こうきりだした。

「頭がガンガンガン痛いたくなつてね。起きおきなきや、起きおきなきやつて思うんだけど、からだが棒ぼうのようにかたくなっちゃつて、ぜんぜん動かないの。」

「チコ、時間ですよ。学校にまた、おくれますよ。ほら、いつまで寝ねてんの！」

つて、母さんのさけぶ声が聞こえるけど、気持ちがあせるだけでぜんぜんダメなの。気が遠くなりそうで、クラクラするの。

やっこの思いで洋服ダンスの方に行つて、制服せいふくを着ようとする——ツンつて、なんかにおうのね。ああ、これ学校のおいだ、たまらないな。ゆうべのオムレツがおなかの中から逆流ぎゃくりゅうしてくるの。

「ダメ、ダメッ」つて、口にタオルをあてて、あたし、すわりこんじゃつた。

こんな日は、「気持ち悪いから、学校休むよ」つて、いうことで、どうにか母さんも納得なつとくしてくれるんだけど。でも、ふしぎなのはね。九時、十時をすぎて、お昼近くになると、朝の吐き気はけがウソのように直つちゃうの。

「チコ、仮病けびょう使ったんじゃないでしょうね」なんて、母さんに言われちゃうけど、うまく

説明せつめいできないよ」

小学校は、快調かいちょうガールですごしたチコだったが、中学に入って早々そうそうに、変調へんちょうガールとなつてしまったのだ。三日休んでは、二日学校に行き、また一週間休んでは、四日教室に顔を出す——そんな状態じょうたいのころだった。

チコは、タメ息をつきながら言った。

「なぜ、学校がイヤになったかかっていうと、もうたくさん理由があるの。でも、学校に行かないって、こんなにつらいことだとは思わなかったよ。

登校拒否とうこうきひってあまえてるって、おとなは言うよね。あたしも、昔はそう思っていた。

『チコはいいわね。ボケーツとして一日すごせるなんて、いい身分みぶんね』なんて、母さんに言われると、カーッときて、泣きたくなるほどアタマにくるよ。

『親のくせに子どもの気持ちがあるんなにわからないのか!』って、二階にかけあがって、上からドンドンものを投げてやるんだ」

「すごいね。そりゃ、いわゆる家庭内暴力かていないぼうりよくじゃないの?」

と、ぼくもヘンに感心かんしんすると、チコは、

「ちがいますよーだ。理性りせいある抗議こうぎですよ。あたしが投げるのは、あたつてもなんてこと

はないスリッパとか洋服なんだから」

と言いかえした。

「でも、学校に行っていないと、だんだん肩身かたみのせまい思いをさせられるのよね。お昼をすぎて、天気がいいから散歩さんぽにでも行こうかと思うと、玄関げんかんをでるときになんか気になるのよね。

おむかいの家のオバサンが同級生のお母さんでしょ。そのオバサンって、よく植木うえきの手入れをしているの。なんか目があいそうでコソコソしてでかけるのも、かったるくなっちゃうでしょ。だから、学校の授業がある時間は外に出ないようになっちゃおう」

チコのストレスはかさなっていく。

「登校拒否とうこうきよひって言葉ことば、大きいだな。なんか罪人ざいにんみたいじゃない。でも、実際じっさいに外に出ないで家にこもっているでしょう。一週間もすると、ワアーツとさけびだしたくなるほどイライラしてくんのよね。学校行ってもムカツクし、休めば休んだで爆発ばくはつしそうになるし、あたし学校なんか無視むししてやろうと思って「学校拒否がっこうきよひ」しているんだけど、学校のこと、気になって気になってしかたないの。

それで、妹のアケミにからんだり、あたったりして——母さんにしかられたり、カッコ